

### 私を感じる韓国

私は韓国に行ったことが一度もありません。だけど、私にはめいっぱい韓国を感じられる場所があります。岡山にあるハンセン病療養所の長島愛生園です。そこには、私が大好きで尊敬する金泰九（キムテグ）ハラボジがいます。ハラボジの部屋にはいると少しキムチの臭いがします。そこは私の“韓国”なのです。

現在 90 歳のハラボジは今から 70 年以上前に、日本に来た在日韓国人です。ハラボジは、日本人から差別されないようにと、自分から日本の陸軍に入隊します。日本の敗戦後、ハンセン病を患い、妻を残して長島愛生園に強制収容させられました。

日本には 1996 年まで、「ハンセン病予防法」という法律がありました。ハンセン病にかかった人を終生絶対隔離する法律です。それで、患者たちと家族を引き離し、ふるさとを追われ、名前も変えられました。療養所は病院です。しかし、ハラボジたちは強制的に労働をさせられ、手足が不自由になりました。療養所には納骨堂もあります。骨になっても、家族の元へ、そして、ふるさとに帰られない人々が今も悲しく眠っています。

ハラボジは現在、目もよく見えないし、耳もよく聞こえません。でも緊張しながら交わした初めての会話で一番印象に残るのは「ご飯おいしいですか？」って聞くと、「うん、おいしい」と答えてくださったことです。そしてハラボジが私に、「韓国人ですか？」と言ってくくださった時、ハラボジが私を韓国人として認識してくくださったのは誇りだと考え、私はとびっきりうれしくて、思わずハラボジに抱きつきました。その時、私は心から韓国語を勉強していたことに対してやりがいを感じました。

ハラボジと同じように私の母はフィリピンから来たため、言葉もわからない日本で、母は辛い思いをしていたはずですが。私は生まれも育ちも日本だけど、母がフィリピン人という理由で、からかわれることがありました。そのため、私はハーフという事実を隠したかったし、母を恨んで、母に強く当たりました。しかし、ハラボジと出合っ、考え方が変わりました。「自分が幸せだと思ふ人は、他者を差別しない」。これは、ハラボジの言葉です。長い間、厳しい差別の歴史に耐えてきた。しかし、私たち、日本の学生たちに対してとても親切にしてくくださったハラボジのこの言葉を知って、学校でからかわれたことを、母のせいにしてきた自分がとてもちっぽけに思えました。このことをきっかけに私は日本で「混血」を意味し、「半分」という意味も持っているハーフという単語で自分をおとしめるのではなく、フィリピン人と日本人の二つの国を持つ「ダブル」として、胸を張って生きる決心をしました。ハラボジの指のない硬くて温かいハラボジの手を握ると、力が湧き出てくるのです。

ハラボジはいつも、私たちに韓国キムチとラーメンをごちそうしてくださいます。ハラボジの笑顔に包まれて食べるラーメンは、ハラボジの愛情たっぷりで最上級に美味しいです。みなさんも食べたいでしょ。

私を感じる韓国。それは、ハラボジの笑顔と愛なのです。